

名の戦争：デリダにおける遺産相続について

東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程：中間 統彦

2004年8月『ル・モンド』に、「私は私自身と戦争状態にある」というジャック・デリダのインタビュー記事が掲載された。彼はそのインタビューのなかで、自らの著作が十分に読まれないかもしれないという不安を吐露している。彼の読者の内には有名な哲学者や解釈者が多数いた（ナンシーやスピヴァク、マラブー、カプートなど）にもかかわらず、彼はその複雑な心の内を語るのである。この不安は、決して迫る死の恐怖によってもたらされたものではない。というのも、この不安は、遺産相続に必然的なものであり、書いたものが死んでも生き続けるエクリチュールの内に織り込まれているからである。「エクリチュールの思想家」としてのデリダは、同時に、生き残りを巡る「遺産相続の思想家」でもあった。そのことは、彼が残したテキストの内に、「他者への応答」という形で、はっきりと表れている。遺産相続が他者への応答に関わるものだとすれば、そこには相続を巡る倫理＝政治的な問題系が含まれていることになる。そこで、本発表では、この不安に満ちた遺産相続について、デリダにとって遺産相続とは何を意味するのか、そして、デリダの遺産を相続することはいかにして可能なのかという二つの点から論じる。

遺産相続の問いについて、ナースやミラー、ロゴザンスキーをはじめとして、数多くの研究が発表されている。本発表では、それらの先行研究とは異なるアプローチ、すなわち「名」なかでも特に「地名」から分析を試みる。世界中を旅しながら、講演や執筆活動を行ったデリダは、様々な土地の名前について言及している。アルジェリア（エルビアール）、アメリカ（ニューヨーク、カリフォルニア大学アーヴァイン校）、イタリア（ローマ、カプリ島）、アイルランド（ダブリン）、南アフリカ（ケープタウン）、そして、より広い場所を指す名前として、ヨーロッパ、西洋、東洋…。数限りないそれらの地名の内には、まさしく「戦争状態」にあったアウシュヴィッツやエルサレムといった名も含まれている。『信と知』や「バベルの塔」において、この戦争状態にある名は、神を巡る争い、すなわち、キリスト教やイスラム教のあいだで繰り広げられた「宗教戦争」の歴史と絡まりあう。デリダの遺産相続を巡る問いは、あらゆる名の中で生じる絶え間ない戦争状態を示唆し続ける。本発表は、遺産相続の問題系について、名を巡る争いという観点に即して検討を行う。

具体的には、以下の手順に従って発表を行う。まず、『マルクスの亡霊たち』においてデリダが語る「遺産相続の偶然性」の内容を明らかにする。次に、『他の岬』における「来るべきヨーロッパ」を巡る分析を辿ることで、場所と他者性への開けの関係性を検討する。最後に、「バベルの塔」で展開される固有名についての分析を参照しつつ、デリダの思想が、土地の持つ固有性を際立たせつつも、他者への開かれを可能とする場の分析であることを明らかにする。